

第2特集

大学入学者選抜の現在地

「大学入試のあり方に関する検討会議」と「大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者会議」という2つの審議会が終了し、審議まとめと提言が示されて以降、大学入学者選抜（入試）に関する大きな動きは表面上あまりないように見える。読者の関心も、新課程が始まったことに関する情報キャッチアップに移っているようだ。もちろん、新課程開始により入試に与える影響は大きいだろう。

一方、2023年2月に公表された「教学マネジメント指針（追補）」は、入試に関する内容である。

また、コロナ禍を経た近年、総合型選抜を中心とした年内入試を受験した入学者の増加が報道されるようになり、注目を集めているようだ。

この特集では、入試に関する状況や論点の現在地を探索したい。年内入試、特に総合型選抜にスコープを当てながら、時に「入試とは」というそもそもに立ち返りながら、現状を探った。

※本特集において大学入学者選抜は「入試」と称する。

CONTENTS

編集部レポート	高校生は自分らしい進路を実現できているか 進路検討行動の早期化・長期化と安定志向に対応する総合型選抜
調査報告	現大学1年生が受けた入試のリアルを知る
インタビュー	全国高等学校長協会 事務局長 宮本久也氏 文部科学省高等教育局大学入試室長 平野博紀氏
事例	創価大学 総合型選抜 PASCAL 入試 大谷大学 アドミッション・オフィス入試 九州工業大学 総合型選抜 I 桃山学院大学 ビジネスデザイン学部 総合型選抜
考察	大学入試の起点はどこか

Report 編集部レポート

高校生は自分らしい進路を実現できているか 進路検討行動の早期化・長期化と安定志向に対応する総合型選抜

年内入試の実態はどうなっているのか。ここでは、3つの観点と調査からその実態に迫りたい。

カレッジマネジメント編集部
鹿島 梓

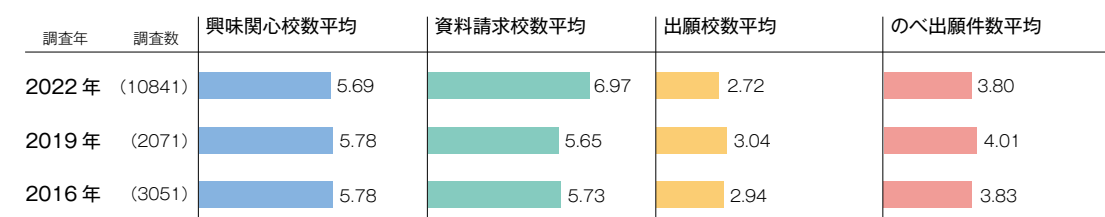
01 高校生の進路検討行動の実態は？

リクルート進学センサス 2022 より（大学進学者）

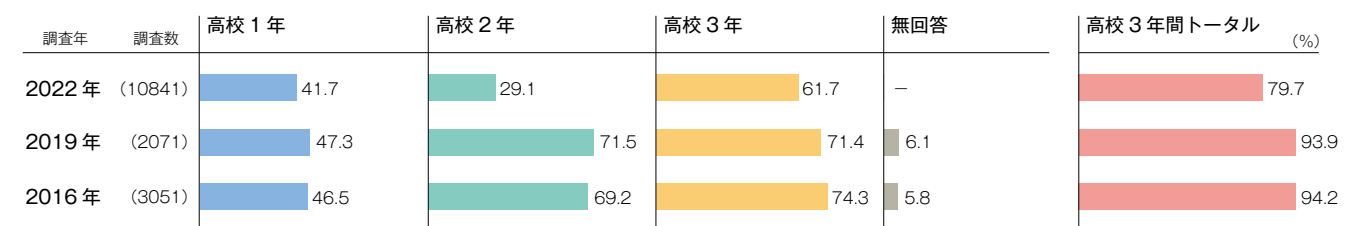
調査概要

- 調査目的： 高校生の進路選択プロセス（行動・意識）を中心に、進路選択に関しての情報源、学校主催イベント、進路指導の内容と影響等を把握し、高校生の進路選択の現状を明らかにする
- 調査期間： 2022年3月4日～4月5日 投函・インターネット回答締め切り
- 調査方法： 郵送調査+インターネット調査
※調査票を郵送、回答を記入のうえ郵送または記載のURLからインターネット回答
- 調査対象： 調査開始時点で2022年に高校を卒業見込みの全国の男女210,000人
令和3年度学校基本調査の「全日制・本科3年生生徒数（県別）」、「中等教育学校・後期課程3年生（県別）」を基に、リクルートが保有するリストより調査対象とする数を抽出
- 有効回答数： 14,968人（回答率7.1%）うち、本報告では大学進学者10,841人が対象

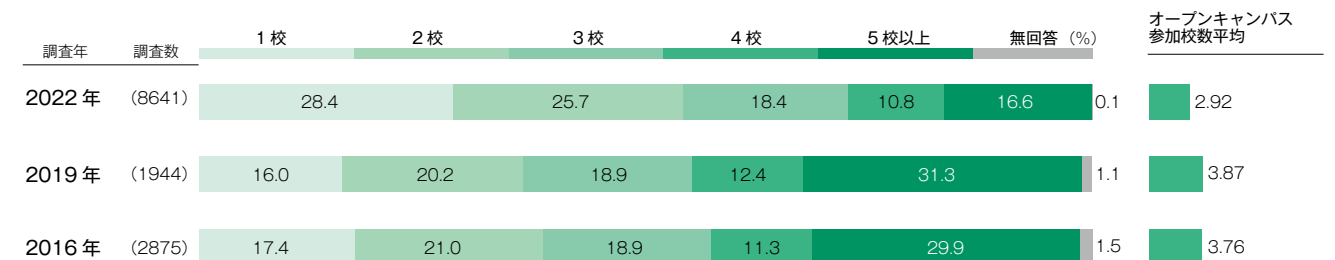
図表1 興味関心校数・資料請求校数・出願校数・出願件数（実数回答）



図表2 学校主催のオープンキャンパス（OC）参加経験（各学年単一回答）



図表3 学校主催のオープンキャンパス（OC）のべ参加校数（実数回答）



進路検討行動は全体的に早期化。コロナ禍で検討行動は停滞気味

まず、高校3年生が大学に興味関心を持ち、資料請求を経て出願するという行動を見ると(図表1)、2022年は資料請求校数が過去に比べて多いが、出願に至る校数は減少していることが分かる。一方でコロナ禍で進路選択を行った世代特有の事象として、OC参加経験は過去に比べて減少し、参加校数の平均も2019年より1校減少して約3校となった(図表2・3)。こうしたデータからは、OCに参加しづらい状況の中で請求した資料を中心に出願校を最小限に絞り込んでいる様子が窺える。

また、図表4の進路検討行動の時期を見ると、2013年以降の変化として、「どんな学校があるかを調べ始めた時期」を筆頭に、概ね全ての行動が高校1年生から始まっており、早期化の様子が著しい。高校に入ってからすぐに大学のことを考え始めるわけだ。一方で「第1志望の学校を受験校に決めた時期」は他の行動に比べると大きな変化はなく、概ね高校3年生の春～秋に集中する。つまり最終的な選択時期は変化がないが、早期化により長期化が起こっているというのが全体的な概観である。

図表4 進路検討行動時期の経年比較 (各行動単一回答)

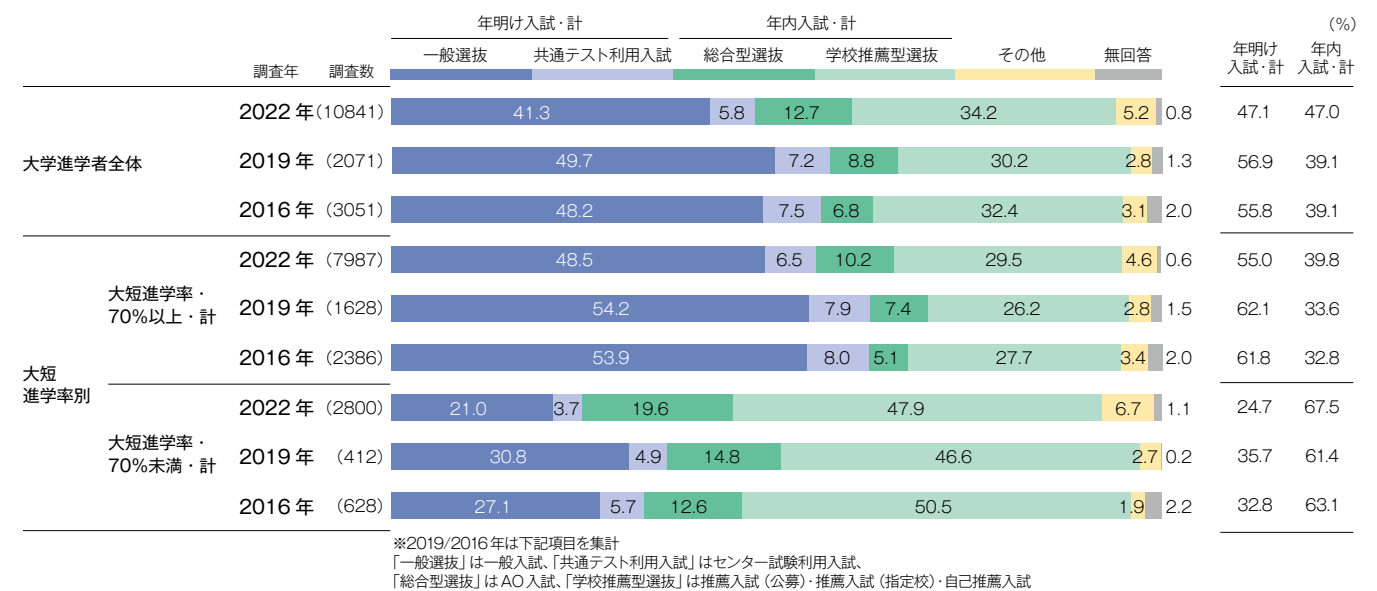


年内入試合格で進学する高校生が増加した影響も、第1志望率が上昇

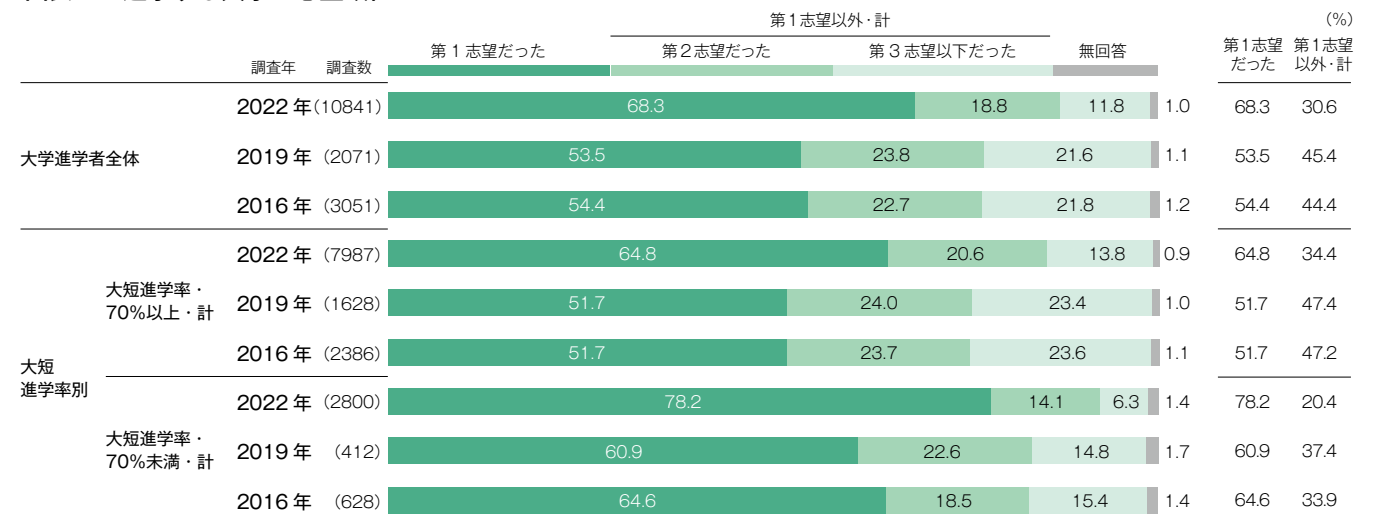
次に、年内入試を受験する生徒は増えているのかを見ていきたい。図表5で「進学する学校に合格した入試方法」を問うと、2019年に比べて2022年はいわゆる「年明け入試」である一般選抜(49.7%→41.3%)・共通テスト利用入試(7.2%→5.8%)が減少し、「年内入試」である総合型選抜(8.8%→12.7%)、学校推薦型選抜(30.2%→34.2%)が増加している。大短進学率別で見てもその傾向は変わらず、全体的に年内シフトが進んでいると言えそうだ。

図表6では進学する大学の志望順位を問うた。第1志望率は前回から約15pt増加し、68.3%と高い。大短進学率別で見ると、進学率70%未満では78.2%と、約8割もの生徒が「第1志望に進学した」と答えている。ここでは掲載しないが入試方法別では「総合型・学校推薦型選抜・計」の第1志望が87%と非常に高く、こうした入試形態に合格して入学している学生が増えていることが、こうした状況に寄与しているものと推察される。

図表5 進学する学校に合格した入試方法 (単一回答)



図表6 進学する大学の志望順位 (単一回答)



02 高校現場の動向は？

リクルート高校教育改革調査 2022 より（「総合的な探究の時間」導入校）

調査概要

- 調査目的：高校の教育改革に関する現状を明らかにする
- 調査期間：2022年8月4日（木）～9月9日（金）投函締め切り
※2022年9月13日（火）到着分までを集計対象とした
- 調査方法：郵送調査+インターネット調査
- 調査対象：全国の全日制高等学校 4,721校
- 有効回答数：943件（回収率20.0%）

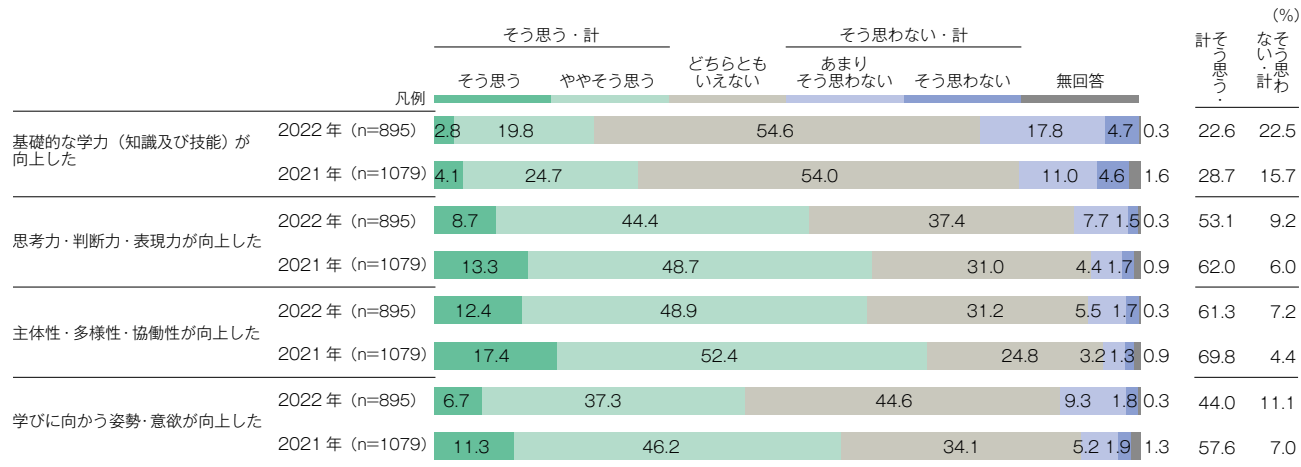
探究は生徒を成長させる実感が高いが、教員の負荷が課題

高校では2022年度より新学習指導要領がスタートした。その要となる「総合的な探究の時間」の導入校に、取り組みによる生徒の変化を尋ねた(図表7)。変化(向上)を感じている割合は【主体性・多様性・協働性】【思考力・判断力・表現力】【学びに向かう姿勢・意欲】で高い。一方で【知識及び技能】では評価が分かれる結果となっている。

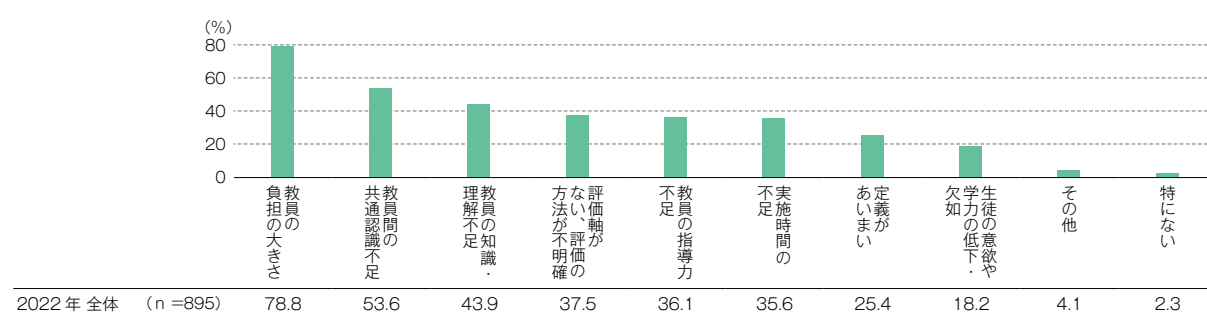
「総合的な探究の時間」に取り組むに当たった課題(図表8)では1位「教員の負担の大きさ」が圧倒的に高く、2位以下

も教員に関する課題が続く。フリーコメントでは、生徒・教員ともに「価値のある学習方法」として積極的に推進しようとする群と、「国が決めたやらねばならぬこと」として受動的に受け取る群とで二極化している。予測不可能な社会で活躍できる資質・能力を培う目的で導入された探究だが、その現場推進が各教員に任されており、各校における探究の意義や価値といった共通認識が必ずしも議論されない中、従来の教科学習とは異なる指導に四苦八苦している様子が垣間見える。

図表7 「総合的な探究の時間」への取り組みによる生徒の変化(各単一回答)



図表8 「総合的な探究の時間」に取り組むに当たった課題(複数回答)



03 総合型選抜は本当に多面的・総合的評価になっているか？

文部科学省 大学入学者選抜の実態の把握及び分析等に関する調査研究(令和5年2月)より

調査概要

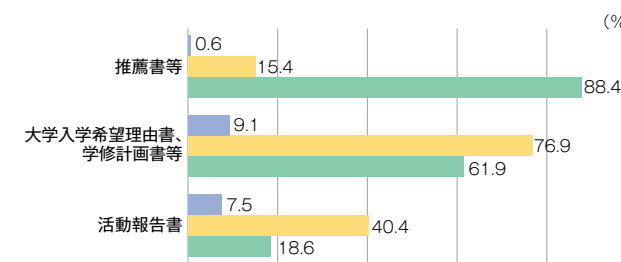
- 調査目的：大学入試改革については、文部科学大臣の下に設置した「大学入試のあり方に関する検討会議」において、これまでに指摘された課題や過去の政策決定の検証等を踏まえて検討が進められ、令和3年7月に「大学入試のあり方に関する検討会議 提言」がなされたところである。当該提言においては、実証的なデータやエビデンスに基づく政策決定の重要性が指摘されており、大学入学者選抜方法の多様化・複雑化が進むなかで、国としての確かな現状分析に基づいて検討を進めるためにも、国内の全大学・短期大学が現在実施している入学者選抜の状況について、最新の動向を網羅的に把握する必要がある。
- 調査期間：令和4年7月14日～令和4年8月31日（遅れて回答のあった大学等も含め、令和4年11月29日までの回収分を集計）
- 調査方法：eメールによる調査票の発送及び回答票回収
- 調査対象：全大学（学生募集停止の大学を除いた、国立大学、公立大学、私立大学、公立短期大学、私立短期大学の計1,071大学）
- 有効回答数：1,071大学（76,113選抜区分）（回収率：100.0%）

学力検査以外の評価状況を見ると、総合型選抜が多様な要素を活用

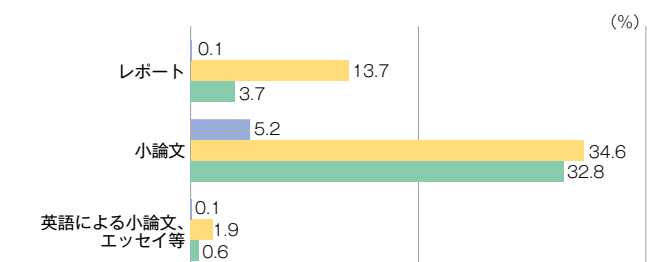
では年内入試自体、特に総合型選抜はどのような選抜になっているのか。文科省調査より、学力検査以外に考慮する資料等の利用率について、図表9～12に詳細を示した。これによると、一般選抜は「学力検査以外の要素」で取り入れているのが調査書58.3%以外に特筆すべき点が見られず、基本的に知識・技能を問う入試である点が明確である。学校推薦型選抜では「推薦書等」88.4%、「調査書」86.2%、「評定平均」81.3%といった高校発の書類や経験を中心に、

「面接」72.1%で掘り下げる入試であると言えそうだ。総合型選抜は、「調査書」88.4%、「評定平均」72.3%、「面接」87.2%が高い点は学校推薦型に似ているが、それに加えて「大学入学希望理由書・学修計画書等」が76.9%と高く、「レポート」「小論文」「プレゼンテーション」等も他方式に比べると高いことから、多面的・総合的に人材を評価し、大学教育につなげる役割を担っていると言えそうだ。

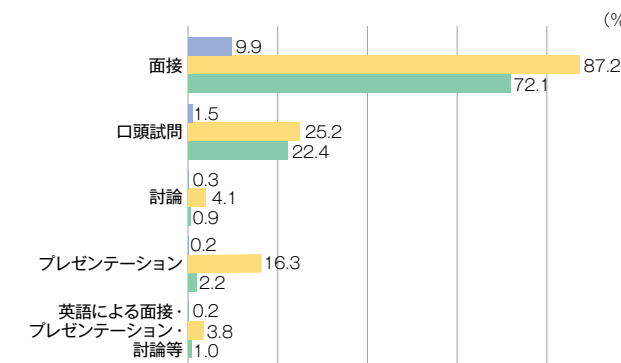
図表9 資料・書面等の利用率(複数回答)



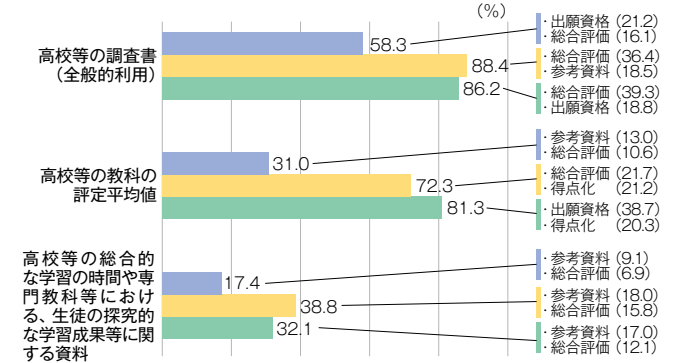
図表10 レポート・小論文等の利用率(複数回答)



図表11 面接・討論等の利用率(複数回答)



図表12 高校等における学習成果の利用率(複数回答)



【図表9-12について】
 ■一般選抜(n=29,688)
 ■総合型選抜(n=11,521)
 ■学校推薦型選抜(n=18,478)
 (n=59,687選抜区分) ※国公立・大学計